

論文

保育ドキュメンテーションに見られる子どもの姿

Young children's learning in childcare documentation: Through textual analysis

玉瀬友美 (高知大学教育学部)

中山美香 (高知大学教育学部附属幼稚園)

岡谷里香 (高知県教育委員会)

川端美穂 (北海道教育大学)

TAMASE Yumi¹, NAKAYAMA Mika², OKATANI Rika³ and KAWABATA Miho⁴

1 Faculty of Education, Kochi University

2 Kindergarten affiliated with the Faculty of Education, Kochi University

3 Kochi Prefectural Board of Education

4 Hokkaido University of Education

ABSTRACT

This study aimed to determine what teachers perceived young children to be learning through analyzing the words described in three years of childcare documentation. Throughout the three years of documentation produced from 2019 to 2021, teachers described many behaviors in which young children were engaged with their friends, and their thoughts at the time. Teachers also often described episodes of young children playing with water. The episodes were often described with words related to vision, suggesting that teachers often focus on what young children are looking at. The characteristic words described in the documentation varied each year, but the common thread across the years was that there were many descriptions of how the young children were spending time with their friends and what they were thinking. There was a tendency for greater occurrences of the words “interesting,” “ingenious,” and “mysterious” in the second half of the three years of documentation. From this, it was inferred that through the practice of documentation, teachers managed to gain a deeper understanding of the importance of “independent, interactive and deep learning” for young children.

問題

幼児期の教育は、就学前のある限定された期間における力の伸びだけを目指すものではなく、小学校以降の様々な学びにつながる力を育み、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである。しかし、教科ごとの学習内容に関して教科書を使用しながら系統的に学び、達成目標への到達度が重視される小学校教育とは異なり、幼児期の教育は、教科の区別がなく、生活リズムに合わせて保育が進められていく。そして、保育のねらいは達成目標ではなく方向目標として設定され、保育者がそのねらいに向けて構成した環境の中で、子どもたちは遊びを通して、様々な事柄を一体的、総合的に学んでいくのである。このような幼児教育は、学びの過程が可視化されにくい特徴をもつといわれている（樋口・村岡・元木・大西・庄司, 2018）。

平成29年に告示された幼稚園教育要領では、生きる力の基礎を育むため、幼児期の教育を通して子どもに育まれる資質・能力を「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱から構成されるものとし、それらが一体的に育まれることの重要性を示している。そして、これらの力を保育の中で育む際に重要なのは、教育課程を編成し、その実施状況を評価して改善し、教育活動の質の向上を図っていくこと、つまりカリキュラム・マネジメントの確立である（文部科学省2017）。保育を評価し、改善していくためには、まずは保育の様子を記録し、可視化することが求められる。そのための手立ての1つとして、近年、ドキュメンテーションが注目されている。

保育記録としてのドキュメンテーションは、イタリアのレッジョ・エミリアの保育実践が紹介されたことをきっかけに世界各国の幼児教育に広まっていった。レッジョ・エミリアの乳幼児教育では、子どもを有能で能動的な存在と捉え、子どもが主体的に活動し、一人ひとりの個性が引き出されることが大切にされている。ドキュメンテーションは、レッジョ・エミリア・アプローチに基づく乳幼児教育で重要とされている1つの実践活動であり、「レッジョ・エミリア市自治体立幼児学校と乳児保育実践の憲章」においては、ドキュメンテーションは「子どもたちと実践した取り組みについて記録を生成し、収集する活動」と示されている（野澤, 2021）。日本においてドキュメンテーションは、「日々の記録や、実践を写真や動画などに残し可視化したものすべて」（高丘・湯地, 2022）、「写真を効果的に用いて、一人ひとりの子どもの姿を描き出し、発信するもの全般」（岩田・大豆生田, 2018）などと捉えられており、本研究では、ドキュメンテーションを「写真を用いた保育記録」とする。

保育におけるドキュメンテーションに関する研究として、藤川(2022)は、保護者への発信方法をそれまでの文章

のみの保育記録から、文章に写真を加えたドキュメンテーションに変えた保育園の保護者を対象にアンケート調査を実施し、保育活動の伝え方の変更を保護者がどのように捉えているかについて検討した。その結果、写真付きの保育ドキュメンテーションの方が、保育活動への理解だけでなく、子どもや他の保護者とのコミュニケーションも高まったと保護者が捉えていたことが報告されている。

一方、保育者を対象にした研究として、高丘・湯地(2022)は、ドキュメンテーションに関して「工夫していることは何か」「保護者等に伝えたいことは何か」「どんな難しさを感じているか」という質問を用いてインタビュー調査を実施し、ドキュメンテーションや子どもの評価に対する保育者の考えを検討している。その結果、保育者はドキュメンテーションを子どもの姿の振り返りの手立てとしてだけでなく、家庭との連携や小学校教師との共有手段として用いていることが明らかにされている。同様に、藤崎(2022)は、それまで口頭のみで保育の振り返りを行っていたが、ある時期からドキュメンテーションを作成するようになり、1週間ごとにドキュメンテーションを用いた振り返りを行うようになった園の保育者を対象に、保育の振り返りの内容を検討した。その結果、ドキュメンテーションを用いた振り返りによって保育者の子ども理解が深まり、同僚との協力関係の風土づくりにより影響を与えたことが考察されている。

保育者と保護者を対象とした研究として、前田・浅井(2022)は、ドキュメンテーションの形式や意義に関する評価を比較した。その結果、ドキュメンテーションの様式や掲示方法については評価に差がみられなかったが、ドキュメンテーションの内容や子育て支援に関して差がみられ、「ドキュメンテーションを読むことで園や保育者に信頼が増す」「ドキュメンテーションを読むことで子育ての相談がしやすくなる」と答えていたのは保育者よりも保護者に多かった。このような結果から、前田・浅井(2022)は、保育者はドキュメンテーションを単に保育を紹介するものとして捉えるのではなく、保護者の子育て支援への活用を意識することの重要性を指摘している。

このように、インタビューやアンケート調査を通して、保育者や保護者におけるドキュメンテーションに対する認識を検討した研究では、保護者においては、ドキュメンテーションは保育活動への理解だけでなく、子どもや他の保護者とのコミュニケーションを高めるものとして捉えられていること、そして、保育者においては、ドキュメンテーションは保育を振り返り、子ども理解を深め、同僚あるいは小学校教師と連携するための有効な手段として捉えられていることが明らかにされている。

一方、ドキュメンテーションに対する捉え方ではなく、記録としてのドキュメンテーションに焦点をあてた研究と

して、前田(2019)は、ある保育園においてドキュメンテーションとして記述された内容を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目の視点から質的に分析し、保育者が捉えた子どもの育ちを検討した。その結果、10項目はすべて1年間のドキュメンテーションの内容に含まれていたが、該当数には偏りがあり、「1. 健康な心と体」は対象事例のほぼすべてに該当し、次いで「2. 自立心」「3. 協同性」が多かったこと、また、該当時期には差があり、項目間の関連性があることが考察されている。なお、前田(2019)では、ドキュメンテーションにおいて保育者の思いが記述されている部分を抜粋し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目に当てはめていくという方法を用いており、保育者が子どもの姿を記述している言葉については分析の対象とされていない。しかし、保育者の思いが直接的に記述されなくても、子どもの学びの姿をどのように切り取り、言語化しているかを分析することを通して、保育者がどのように子どもの育ちつつある姿を捉えているかについて明らかになると考えられる。これに関連して、川端・玉瀬・二井・中西・木村(2022)は、保育記録の1つであるラーニングストーリーを対象にテキスト分析を行い、ラーニングストーリーに記述された語から、子どもの関心や知識が保育者によってどのように価値づけられているかについて考察している。

高知大学教育学部附属幼稚園（以下、附属幼稚園と表記する）では、保育の中でみられた子どもの学びの姿を捉えて可視化し保護者に伝えることを当初の目的として、2018年2学期よりドキュメンテーションを作成し、保護者全体に向けて掲示する実践を行ってきた（高知大学教育学部附属幼稚園, 2021）。そして、3年間の取り組み後の教員アンケートの結果では、ドキュメンテーションの内容が変化したことや、各担任は子どもが心を動かしているのはどこか、何を楽しんでいるのかなどについてより深く捉えるようになったことが報告されているが、具体的な検討はなされていない。

本研究の目的は、附属幼稚園で作成された3年間の保育ドキュメンテーションに記述された語を分析することを通して、保育者が捉えた子どもの姿を明らかにすることである。

方法

（1）附属幼稚園におけるドキュメンテーション実践

附属幼稚園では「子ども達の何が育とうとしているのか」「それは『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』のどこにつながっているのか」を保護者に伝えることをねらいとして、2018年2学期よりエピソードと写真から成るドキュメンテーションが作成されはじめた。また、2019年ごろからは、ドキュメンテーションは保護者による保育理解の

向上だけでなく、保育者の幼児理解や保育の質の向上のための取り組みとして位置づけられ、2022年度においても実践活動が継続されている。ドキュメンテーションの作成は担任保育者が順に担当し、提案されたドキュメンテーションの素案は園内の会議において協議される。そのようにして作成された最新版のドキュメンテーションは、保護者や園児がいつでも閲覧できるよう、園の玄関に常時掲示された。また、ドキュメンテーションに記述された子どもの姿と関連する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の該当する項目の名称とその説明がドキュメンテーションの横に貼付された（写真1）。

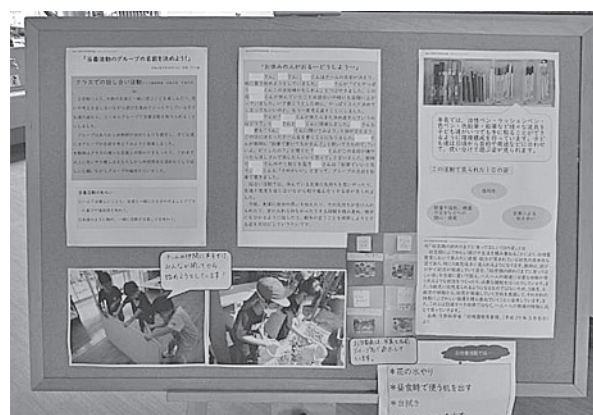


写真1 ドキュメンテーション例

（2）対象

附属幼稚園において2019年度から2021年度までに作成されたドキュメンテーションの中のエピソードとして記述された内容を、分析の対象とした。ドキュメンテーションの掲示日、対象学年、タイトル、文字数および関連する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については表1に示す。

（3）分析方法

テキスト分析には、樋口(2020)が開発したKH coder (ver. 3. Beta. 04c)を使用した。

（4）倫理的配慮

本研究の対象園は研究機関の附属幼稚園であることから、園を対象に実施されるすべての研究への参加に関して、入園時に全ての保護者から文書での同意を得ている。個人情報保護のため、本研究における調査対象者は全て仮名で取り扱い、対象者の人権に配慮した。

結果と考察

（1）出現回数の多い語

2019年から2021年までの3年間のドキュメンテーションにおける抽出語のうち、出現回数が5回以上であった語と

その出現回数を表2に示す。3年間のドキュメンテーションを通して出現回数が10回以上みられたのは、「子ども」

「水」であり、8回以上みられたのは「思う」「友達」であった。「子ども」と「水」については、「ピーマンやキュウリの苗に水をやる子ども」「水でドングリを洗っていてドングリが水に浮くことに気づいて確かめようとする子ども」などの記述がみられた。水は身近な素材であり、水を用いた活動は、スコップや三輪車などのようにそれを使って遊べる人数が限定されることが少なく、興味をもった子どもが活動に参加しやすいために、友達と一緒に遊ぶ姿を記述する際に切り取りやすい場面であるといえよう。

「思う」については、「子どもの考えやよさが広がり、より遊びが豊かになるといいなと思います。」「クスノキの大きさと茂った葉に心を動かされたのではないかと思います。」のように、保育者の思いを記述しているだけでなく、「子どもたちが生き物を思って世話をしていく姿を認め、生き物を大事だと感じる気持ちをもっと育てていきたいと思えます。」「これでいつかまた遊びたいなと思って大事にとっておいたのでしょう。」のように、子どもの思いを記述している場合もある。子どもの姿を客観的に記述するだけでなく、その時の子どもの思いを捉えようとする保育者の姿が認められる。

表1 ドキュメンテーション一覧

揭示日	学年	タイトル	文字数	関連する「幼児期の終わりにまで育ててほしい姿」	
2019年	4月15日	年長 進級3日目～年長の手伝い初日～	650	②⑥	
	5月13日	年中 (地面の穴みつけた)	387	⑥⑨⑩	
	5月13日	年中 (落ち葉掃き)	328	⑦⑧	
	5月27日	年長 (野菜のお世話)	646	⑤	
	6月4日	年小 (砂遊び)	534	⑧	
	6月5日	年長 (幼虫を捕まえる)	382	⑦	
	6月26日	年中 (ケイドロ)	645	①⑧	
	7月5日	年中 (園庭で縄登り遊ぶ)	486	①⑧	
	9月18日	年小 新幹線ごっこ	701	③⑧	
	11月14日	年長 (木曜市で買い物)	1099	⑤⑧	
	1月10日	年中 おもちやさん	848	③⑤⑧	
2020年	5月26日	年小 園生活2日目 面白いねえ	796	⑤⑦⑧	
	6月19日	年長 うめじゅーすやさん	159	③⑤⑧	
	7月9日	年中 カタツムリ	713	⑥⑦	
	7月28日	年長 セミとり	541	①⑥⑦	
	7月30日	年中 うんてい	488	①③	
	10月22日	年小 好きなものに变身して、いろいろな体の動きを楽しむ	611	①⑧	
	2月19日	年中 ひこうきごっこ	712	③④⑧	
	3月5日	年長 お別れパーティー	979	②	
	2021年	4月22日	年小 豆ごはん	362	⑥⑦
		5月17日	年中 たくさん生き物みつけたよ	586	⑦
5月24日		年中 年長さんに教えてもらったおぼけ屋敷ごっこ	439	②③	
5月24日		年長 A子とB男の	406	⑥⑧	
6月24日		年長 おもしろくないやん…	692	①④⑥	
7月9日		年小 フローティングボトルを転がして	640	⑤⑧⑩	
9月16日		年中 (砂遊び)	640	⑥	
10月4日		年中 園庭で秋発見	603	⑤	
10月15日		年長 白いモニュメントがきらきらみれに	965	③④⑥	
10月26日		年長 どんぐりが浮いてる！何で？	635	⑤⑦⑧	
12月15日		年中 びっくりまつぼっくり	449	⑦	
1月18日		年小 クラスのみんなで「おおかみと7ひきのこやぎ(巻)」ごっこ	629	①⑧	
2月28日		年長 係りの引継ぎ～子どもの学びのかたち～	449	②④⑤	

注1) () 内の語は、揭示されたドキュメンテーションにタイトルがなかったため、第一著者が内容をまとめて記載した。

注2) 「幼児期の終わりにまで育ててほしい姿」の①～⑩は次の通りである。①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現(文部科学省,2017)

「友達」については、「今度はどんな遊びで友達と心を響かせ合うのでしょうか、楽しみです。」「一緒に探していた友達の存在・応援があったので、勇気を出して捕まえることができたのだと思います。」といった記述があった。川端ら(2022)においても、ドキュメンテーションの1つである

表2 頻出語リスト(出現回数5回以上)

2019年		2020年		2021年	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
言う	32	子ども	18	言う	31
見る	20	渡る	14	子ども	22
子ども	19	カタツムリ	12	水	17
思う	18	水	12	思う	16
水	17	入れる	12	ドングリ	15
友達	13	考える	10	オオカミ	11
一緒	12	ビニール	9	教師	11
自分	12	セミ	8	砂	11
遊ぶ	11	作る	8	持つ	11
楽しむ	10	姿	8	ボトル	10
先生	10	思う	8	モニュメント	10
書く	9	自分	8	近く	10
買う	9	声	8	入れる	10
野菜	9	友達	8	見る	9
様子	9	見せる	7	自然	9
たくさん	8	先生	7	年長	9
考える	8	入る	7	友達	9
砂	8	教師	6	楽しむ	8
店	8	言う	6	作る	8
遊び	8	手	6	前	8
園	7	探す	6	遊び	8
楽しい	7	飛行機	6	様子	8
穴	7	面白い	6	ヤギ	7
行く	7	網	6	山	7
行動	7	遊び	6	知る	7
新幹線	7	様子	6	入る	7
泥棒	7	アイデア	5	タワシ	6
年長	7	楽しむ	5	一緒	6
今度	6	形	5	鬼	6
枝	6	見る	5	行く	6
持つ	6	小さい	5	砂場	6
少し	6	登る	5	実	6
人	6			手	6
積み木	6			転がる	6
大きい	6			豆	6
庭	6			浮く	6
グループ	5			聞く	6
運転	5			磨く	6
下	5			目	6
感じる	5			スコップ	5
教える	5			ルール	5
教師	5			違う	5
手	5			運ぶ	5
大根	5			園	5
担任	5			屋敷	5
聞く	5			楽しい	5
帽子	5			見せる	5
味わう	5			色	5
様々	5			声	5
落ち葉	5			庭	5
				転がす	5
				年中	5
				面白い	5
				木	5
				誘う	5
				落ちる	5

ことを諦めず、工夫しながら挑戦し、願いが叶った喜びは大きかったと思います。」、2021年には「興味関心をもって何度もかかわり、工夫したり試したりする姿を大切にしていきたいです。」といった記述があった。また、「不思議」については、2019年と2020年には出現していないが、2021年には4回出現していた。2020年には「自分が手を加えるとビニール袋の水が変化したり、木の実が動いたりする様子にも不思議さや面白さを感じていたように思います。」、2021年には「附属幼稚園の広い園庭で、たくさんの自然の不思議に触れてほしいと思います。」「秋の自然物が、子ども達の『不思議』と出あうきっかけとなりました。」といった記述があった。

宇都宮・鍛冶築・岸野・山本・小林(2021)は、幼稚園の自然環境を保育に生かす取り組みをした結果、「子ども達は自然の事物・現象に積極的に働きかけたり、遊びの中で自然の面白さや不思議さを感じたりする姿が顕著に見られた。また、遊びの中でさまざまな気づきを得たり、遊びを工夫したりする子ども達の姿を確認することができた」と報告している。そして、このような姿は、領域「環境」のねらい及び内容と関連するものであり、アクティブラーニングすなわち「主体的・対話的で深い学び」の実践となったと考察している。同様に、柳原(2018)は、森を中心に保育を行う、自然体験型の活動において、「自然の大きさ、不思議さ、美しさ」に感動することはアクティブラーニングの基礎となる活動であると述べている。

幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)「第2章ねらい及び内容」における領域「環境」には、「1 ねらい」として以下の(1)から(3)が示されている。

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

また、「2 内容」の(1)および(8)には、以下のよう示されている。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

附属幼稚園は園庭が広く、四季折々に花や昆虫や落ち葉などが保育環境の一部となり、子どもたちが好奇心や探究心をもって自らそれらに関わることを大事にした保育が引き継がれている。附属幼稚園の3年間のドキュメンテーション

の記述の中で、「面白い」「工夫」「不思議」という語が後半になって出現数が増加していたこと、そして、それらは領域「環境」のねらい及び内容との関連がみられることから、附属幼稚園の保育者は3年間のドキュメンテーション実践を通して、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」の姿をより深く捉えるようになったといえるかもしれない。

まとめ

本研究の目的は、附属幼稚園で作成された3年間の保育ドキュメンテーションに記述された語を分析することを通して、保育者が捉えた子どもの姿を明らかにすることであった。

3年間のドキュメンテーションを通して、保育者は子どもが友達と関わる姿や、その時の子どもの思いを記述することが多かった。また、水を使った活動をエピソードとして切り取ることが多かった。感覚を表す語については、視覚に関する語が多く記述されていたことから、保育者は子どもたちが何を見ているのかについて捉えようとする人が多いことが窺われた。

年度別にみると、ドキュメンテーションに取り上げられた保育実践は年度ごとに異なっていたため、記述された特徴的な語は年度による差があったが、子どもたちが友達とどのように過ごしているのか、そして何を思っているのかについての記述が多いことは年度に関わらず共通していた。

3年間のドキュメンテーションの後半に「面白い」「工夫」「不思議」という語の出現数が多い傾向にあったことから、保育者は、ドキュメンテーションの実践を通して、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」の姿をより深く捉えるようになり、子ども理解が深まった可能性が示唆された。

【引用文献】

- 藤川志つ子(2022) 保護者に対する保育活動の伝え方の変更による効果の検討—アンケートの分析から見えてきたこと— 淑徳大学短期大学部研究紀要, 64, 145-151.
- 藤崎直子(2022) 保育の可視化が保育者へ与える影響について—ドキュメンテーションの活用を通して— 教育実践研究, 32, 1-6.
- 樋口健介・村岡美沙・元木麻水・大西美里・庄司恵(2018) ドキュメンテーションの導入方法の検討—大量の紙コップを使った保育実践を通して— 羽陽学園短期大学紀要, 10, 4, 485-499.
- 樋口耕一(2020) 「社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第2版」ナカニシヤ出版, p. 43.

- 岩田恵子・大豆生田啓友(2018) 保育の可視化へのプロセス 玉川大学学術研究所紀要, 24, 1-13.
- 川端美穂・玉瀬友美・二井仁美・中西さやか・木村彰子(2022) 国内ラーニング・ストーリーの特徴：計量テキスト分析による検討 日本保育学会第75回大会, P-D-6-18.
- 高知大学教育学部附属幼稚園(2021) 『主体的・対話的で深い学びを実現する保育の振り返りと実践のあり方—3年次—』 近森謄写堂, pp. 30-35.
- 前田和代(2019) ドキュメンテーションにみる保育者が捉えた子どもの育ち—「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」による分析— 東京家政大学教員養成教育推進室年報, 7, 19-27.
- 前田和代・浅井拓久也(2022) 保育におけるドキュメンテーション活用に関する一考察(2)—ドキュメンテーションに関する保育者と保護者の評価の比較分析に基づいて— 東京家政大学研究紀要, 62, 1, 41-48.
- 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領, pp. 13-17.
- 野澤祥子(2021) 『保育の質を高めるドキュメンテーション—園の物語りの探究—』 秋田喜代美・松本理寿輝監修 中央法規, p. 46.
- 高丘有季乃・湯地宏樹(2022) 保育者のドキュメンテーションに対する考えに関するインタビュー調査—テキストマイニング分析を通して— 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 36, 129-136.
- 宇都宮森和・鍛冶築みつ子・岸野祥江・山本帆波・小林すずな(2021) 園の自然環境を保育に生かすことで子どもの遊びを学びに高める取組 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学「子ども好適空間研究」3, 13-22.
- 柳原高文(2018) 「森のようちえん」における園児の「アクティブ・ラーニング」および「生活科」とのかかわり 名寄市立大学, 12, 11-21.

【付記】

本論文は JSPS 科研費 JP22H00982 の助成を受けた。

